

# 聞名仁教

第184号 毎月発行  
(発行日) 2026年1月1日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口2丁目7-20  
JR 甲子園口駅下車歩4分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
http://nenbutsuji.info/  
アドレス nenbutuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《聞法会ご案内》

- 〈同期の会〉 毎月22日 午後2時始  
(8月は休みます)
- 〈念佛座談会〉 8月は休み 毎月12日午後3時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉 毎月6日午後7時始
- 〈真宗入門講座〉(副住職担当) 毎月18日午後6時30分始

# 安心のナーバキ

## 佐々木蓮磨

ましく仕つけられた  
ので、それが癖とな  
つて、ときどき口に  
出るだけのものであ  
る」

真宗においては、古来「安心の調理」ということが厳しく行われてきたものです。これは真宗の信心といふものが、他力廻向であつて、凡夫の心を固めるものではないというところからやかましく言われるようになつたものと思われます。しかし、あまりにやかましく言つことになると、かえつて人間の権力が働くようになる結果になりかねないのであります。

香樹院徳龍師は、大谷派におけるズバ抜けた名師であります。徳川の末期は、真宗興隆の黄金時代で、それを雄弁に物語るものが、大谷派本願寺に飾られてある有名な毛綱であります。ところが反面にまた異解異心の論争も随分あちらこちらに起つて、当時

の学者を悩ましたものであります。

そのころ、江戸に信心安心の問題が起つて、両論対立して治まりがつかぬので、山命を受け香樹院が江戸に出来張されたのであります。双方の論者は、なかなかの論客ぞろいで、容易に屈服しそうに見えなかつたのですが、香樹院は双方の代表者を浅草御坊に呼び、ことば柔らかにおっしゃるには「ツマ上がりツマ下がり」ということは着物を着たうえの話、丸の裸にはその論はないぞ」と一言おせられたところ、双方の代表者は一言も述べることなく、随分長かつた安心論争が師の一言で片づいたのでありました。

師は常に称名念佛を相続しておられたので、法中の中には、香樹院は称名正因(称名を往生の正因とする

の学者のこと)だと悪評するものすらあつたのであります。しかし、師の威徳を恐れて直接忠告するものはないので、師の社中(教えを受けている門人)が心配して、恐る恐る師に向つて、「近ごろ世間では、お師匠を称名正因の異解者ではないかと評する輩がおりますが、いかがなものでしようか」と申し上げると、師は「かたちを」と申して、正して、「そうか、自分を称名正因」というものがあるか、それには大きな見そこないをしている。自分などはとても称名正因と言われるほど熱心に念佛は称えておらぬ。さればと言つて、ご恩報謝の念佛を称えているかと言えば、とうていそういう尊い念佛は称えきらぬ。自分の念佛は、幼いころから親が念佛せよ念佛せよと、やか

この答えは到底学解によって始めて言えることばであります。他力の信に徹した人に對する全面的な否定です。これは人間の知性では不可能なことです。如來の仏智によつてのみ始めて知らしめられる人間像でなくてはなりません。

この自己否定を受けておられたがために、他人の安心問題に対してもスキのない批判を下すことができたものと思います。真宗一派の聞法道は、このように厳しい自己否定を受けて行く道であります。

(了)

清沢満之先生に学ぶ

自分を問題にし、  
自分を顧みよと  
いわれます。一

いのちには大いなる慈悲の  
けれども、この大いなる  
ることはできないからです。

言葉がありますように、自分の人生の安定を、自己の外（財産や地位や能力や権

## 『清沢満之先生の言葉』

\*

\*

\*

何をか修養の方法となす。曰く、須く自己を省察すべし、大道を見出すべくから

この言葉は清沢先生の意  
気軒けんこう高な仏教求道の道を表  
わされた文章です。仏教復  
興の高調した明治時代の意  
気込みが感じられます。

離れて、外に眞実を求めて  
もダメだといわれるのです。  
自分を省察すればそこに「大  
道」を見出すことができる  
というのです。

ことに、この大いなる大悲のはたらきが、私たちに名のり、喚びかけ、大悲を知らせてくださる、それによつて私たちは大いなるいのち（大道）を知る（見知）ことができます。

か、あるいは自分の心や考え方や受け止め方など自分の内心を確かにしようとするのが通常です。しかし、私たちにとって人生を安定して生きる道は「遠くにはな<sup>一</sup>。脚下にある」と青沢先生

し、大道を見知世は自己にあるものに不足を感じることなかるべし。自己に

在るものに不足を感じざれば、他にあるものを求めざるべし。他にあるものを求めざれば、他と争つことなかるべし。

自己に充足して、求めず、  
争わず、天下何の處にか之  
より強勝なるものあらんや、  
何の處にか之より広大なる  
ものあらんや。かくして始め

て、人界にありて独立自由の  
はつよう  
大義を發揚し得べきなり。

此の如き自己は、外物他人のために傷害せらるべきものに非るなり。傷害せらるべきと憂慮するは、妄念妄想なり。妄念妄想は之を除却せざるべからず。

「何をか修養の方法となす」とは「どのようにして真実を求めるのかといえば」といわれます。どうしたら本当の幸せを得ることができるかといつてもいいでしょう。それは「自己を省察すべし」で、一番身近な自

時代によく使われた言葉でもつて述べられています。では本文に沿って解説してみましょう。

ここで、自分を省察しないといふわれるのであるが、ここでいわれる省察というのは、自分の行いの是非善悪を反省するとか自分の考え方や心の内容を分析したり観察したりすることではなく、今ここに自分が生きている事実、足下の事実を観るというか感知する、あるいはもつと正確に言えば「今ここに生きてはたらいているなにものかに触れる」と

ち（大道）を知る（見知）ことができるのです。

この大悲のはたらきの深さ、有り難さは『仏説無量寿経』に、釈尊が法藏菩薩の本願とその成就というお話をとして詳しく説かれています。ここに大いなる大悲のいのち（光寿無量）のはたらきが実に詳しく反映されています。このアミダ仏の本願のはたらきを聞いて信じる人は実

て生きる道は一遠くにはない。脚下にある」と清沢先生はいわれるのです。私たちが求める先だつて充実して生きる道（大いなる普遍的な道）はすでに与えられているのです。ただそれを知らないだけです。一番身近な自分のいのちにはたらいている大いなるいのち（如来）の事実、そこに安定の道を見出すのが大事なのです。

るというか感知する あるいはもっと正確に言えば「今ここに生きてはたらいているなにものかに触れる」という意味でありましょう。

たらきが実は詩しく反映されているのです。ですのでこのアミダ仏の本願のはたらきを聞いて信じる人は実際に大いなる大悲のいのち（アミダ仏）にでうことができるのです。

いっている力いたるいのぢ（如來）の事実、そこに安定の道を見出すのが大事なのです。

ですが、自我が中心になつてゐる私たちは難しいといえます。なぜなら小さな自我（いわゆる私、分別的知性）によつて、自我を超えた大きなのちはたらき（大道）を掴むこと、知

次に「大道を見知せば、自己にあるものに不足を感じることなかるべし。」といわれます。人が幸せを求めて、「道は近きにあり、これを人は遠くに求む」とい

出すと、「大道を見知せば、自己にあるものに不足を感じぬ」となるべし。自己に在るるものに不足を感じざれば、他にあるものを求めざれば、他と争うことなるべし。」といわれるのです。

この如来にであうと「満足と他者との平和」が功德として与えられるといわれます。清沢先生は「自己人生への満足」を非常に大事にみています。自己人生に満

「絶対は吾人に満足を与え、反対は吾人に不満を与う。ゆえに満足を生ずるものは善なり。不満を生ずるものには悪なり。満足あれば無欲心あり、無欲心あれば不動心あり。不動心あれば膽勇あり。膽勇あれば無畏心あり。無畏心あれば精進あり。精進あれば克己あり。克己あれば忍辱あり。忍辱あれば不争心あり。不争心あれば和合心あり。和合心あれば社交心あり。社交心あれば同情心あり。同情心あれば慈悲心あり。」

なぜ人にやさしくなれないのか、それは自分の人生に不足があるからだといい、人にやさしくなるのは「自分の人生に満足感・充足感」があることによつてだとい

われます。これは実際そうなので説明がいらないほどです。ここで「絶対」とは如来であり大道であります。自分の人生に不足不満が足させようとして外のものに求めると、必要以上に欲求してしまいます。これを仏教で「貪欲」といい、この物足りようが満足しないと他（人と社会）に対しても怒り腹立ちが盛んに起こってきます。これを「瞋恚」といい、貪欲とともに大きな煩惱であります。ただ、この瞋恚は「私憤」であつて、社会の不正に対する怒りのような「公憤」とは違います。

「自己に充足して、求めず、争わず、天下何の処にか之より強勝なるものあらんや、何の処にか之より広大なるものあらんや。かくして始めて、人界にありて独立自由の大義を発揚し得べきなり。」

といわれます。アミダ仏に  
触れて充足した人はこの世  
での真の勝利者であり、広  
い世界観に生きる人になる  
と讚えておられます。なる  
ほど釈尊は「我は世に勝て  
り」といいました「自他一体」  
の広々とした世界観に生き  
られた人はこれに連なる人  
といつていいのでしよう。  
ところでここでいわれる

「独立自由の大義」とはどういう意味でしょうか。これは『歎異抄』の第七章に、「念佛者は、無碍の一道路なり。そのいわれいかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報も感ずることあたわず、諸善もおよぶことなきゆえに、無碍の一道路なりと

とあります。しかし、この「無碍の一道」ということで、さし障りや困ることが降りかかるついても、この障りの多い人生生活において、お念佛をいただいてアミダ如来にであつた人は、それによつて人生に失望したり、落ち込んだり、悩みが重なつて疲れ果てることがない。障りだらけの人生の中で、アミダ仏と共に生きぬく。アミダ仏に支えられ、アミダ仏の御いのちに乗せられ運ばれていくのであります。そして、自らの為した罪惡の結果（業報）がいろいろ現れてきても、その結果の苦に軽やかに耐えていき、また自分のなす善行を自分の依り処にしようとしたり、自分の善行によつての幸運を期待しないのであります。いわんや魔界外道の類いによつて引き回されない。それゆえ「天神地祇も敬伏する」のであって、神々を頼みにして祈禱をしたりまじないをする必要は全くなくなるのである

「此の如き自己は、外物他人のために傷害せらるべきものに非るなり。傷害せらるべしと憂慮するは、妄念妄想なり。妄念妄想は之を除却せざるべからず。」

といつています。「此の如き自己」というのは、アミダ仏の大きいなる大悲のいのちと一つとなつてゐるいのちの自己です。このような自己は、外物他人によつて壊れもしないし、なくなりもせず、傷もつかないのちです。もし傷つきこわれてしまふようないのちの自己と思うなら、それは妄念妄想にすぎません。もしそのように思つて煩い、不安に取り除かなくてはならぬと清沢先生は仰せになるのです。

こうした人生をあたえられ、この道を証していくことが「独立自由の大義を発揚」するすがただといえましょう。

以上、清沢先生の人生観を述べてみましたが、この

ような人生観を持つて人生

を送ることはレベルが高す

ぎてなかなか難しいように思っています。

ただ清沢先生のいわれる「何ものにも妨げられない自己」を知ること、それに触れること、それは万人の現在に開かれています。

この自己にあれば、この

自己の功德が人生生活に徐々に現れてまいります。今

回述べた清沢先生の人生観もこの功德の延長上にあります。これに従つて歩むことを外にして仏教の教えはないし、眞の宗教もないと思ひます。本願念佛の教えも、このような自己を知り、このような自己に生き、このような自己の願いに従つて生きる道でありますよう。

こうした人生観をすぐ自身につけることは難しいですが、少なくともこういう方向に向つて生きることは今からできることでしよう。

(了)

## 信心夜話

仏法とはこの口仏様に借して上げることであります。今は、私の全体が仏様のものなれど、私等は自分の物と思うから、思つてゐるから、「その口借してくれよ」と仰せられます。

(『松並松五郎念佛語録』より)

\*

アミダ仏様はひとり一人を我が独り子とみそなわし、私もこの功德の延長上にあります。これに従つて歩むことを外にして仏教の教えはいる私たちに、ご自身を知らぬれど、私等は自分の物と思うから、思つてゐるから、「その口借してくれよ」と仰せられます。

こういう背景があつて、アミダ仏は「どうかお前の口を借りてくれよ」とのお心ゆえ、私は「この口仏様に借して上げる」のです。ではなぜ私たちの方から貸してあげるといふ風に思つてしまふのかといえど、私たちは「私の全体が仏様のものなれど、私等は自分の物と思」つてゐるから、それを知つてゐるアミダ仏だから「その口借してくれよ」と仰せられるのです。

ここに「私の全体が仏様のもの」だと松並さんはいいます。これで「私の全体が仏様のもの」と仰せられるのです。そのことを知りきつておられるアミダ仏様はアミダ仏にあうことはできないのですね。そのことを知りきつておられるアミダ仏様はアミダ仏様の方から、ご自身を知らせようとして五劫思惟し、南無阿弥陀仏の声となつて私

たちに喚びかけられます。

人の口において、アミダ仏ご自身が「南無阿弥陀仏」と称えてくださるのです。アミダ仏が私の口において「称えてくださる」のです。その声が私たちの口に出てくださる南無阿弥陀仏です。松並さんに「称えてくださる稱えましょ」という有難い言葉があります。

アミダ仏が私の口において称えてくださる、これが元にあつて私の口のお念佛になつてくださるのです。

アミダ仏にこの口をお貸し

せられ、そのお言葉に従つて

「アミダ仏にこの口をお貸し

する」これが称名念佛してい

るのですがたです。この称名念佛において、アミダ仏は「ここにいる、汝を摂め取つて安心してくれよ」とのお心が知らされるのです。

こうしてアミダ仏とともに生き、そうしてこの世を終つてアミダ仏の大悲のいのちの領域に至らしめてくださるの

が昨年の十二月にアップされま

した。なにしろ時間制限です

ニターに出したのを見ながらの

話でした。とてもモニターが小

さいので字を追うのが難しく表

情が乏しくなつております(笑)

youtube の法話は『みどう法信』

(大谷派難波別院主催)という

チャンネルの中を、youtube で検

索されたら幾つかの法話の中に

21組のチャンネルにも別の法話

があります。

にはありません。私たちは自分

のいのちを「自分の物と思

う」、これが迷いの始まりです。

アミダ仏のいのちの中には

ながら、このいのちを「私の

ものである」と思い、アミダ

仏の御いのちから自分を切り離し、愛着し、こうして生老

病死の苦(不安)の中で右往

左往しているのです。この私

に「お前の口を貸して称えさ

せてくれよ」とアミダ仏は仰

せられ、そのお言葉に従つて

「アミダ仏にこの口をお貸し

する」これが称名念佛してい

るのですがたです。この称名念佛において、アミダ仏は「ここにいる、汝を摂め取つて安心してくれよ」とのお心が知らされるのです。

こうしてアミダ仏とともに生き、そうしてこの世を終つてアミダ仏の大悲のいのちの領域に至らしめてくださるの

が昨年の十二月にアップされま

した。なにしろ時間制限です

ニターに出したのを見ながらの

話でした。とてもモニターが小

さいので字を追うのが難しく表

情が乏しくなつております(笑)

youtube の法話は『みどう法信』

## 住職雑感

謹賀新年

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明

中川政二

土井眞由実

吉田徳子

中村泰司

中村律子

令和八年元旦